異界の姫巫女

茶倶楽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
異界の姫巫女

【Ｎコード】
Ｎ８７８９Ｌ

【作者名】
茶倶楽

【あらすじ】
異世界に召喚された理由は神様の尻拭い！？　古の日本に似た異世界にトリップしてしまった姉弟が、周囲の状況に流されながらも元の世界に戻る為に適当に頑張る物語。（弟目線で描く、のんびりとした和風異世界ファンタジー）

第0話：プロローグ

俺達の目の前には直径五十センチ程度の半透明な物体が、淡い光を放ちながら浮かんでいた。

ちなみに俺は自分の事を何の変哲も無い一般人だと自負している。銀河の彼方にある光の国からやって来た、物理法則を無視するほど巨大な身長を誇るヒーローでは無いし、訳の判らない超技術で強化人間に改造され、昆虫系の姿に変身して悪と戦った記憶も無い。もちろん魔法や超能力を使えるはずも無く、めでたく今年度に高校生としての第一歩を踏み出すまで、平々凡々と過ごしてきたつもりだ。

流行の服や今をときめくアイドルなどにはほとんど興味は無いが、好きなバンドの最新曲を心待ちにしていたり、可愛い彼女が出来たら良いなと内心ちょっとだけ夢見ていたりと、そこら辺を歩いていれば普通に見かける、珍しくもなんとも無い単なる男子高校生のはずである。変わり者とたまに言われるが。

少し特異な点として、幼少の頃から狩衣（かりぎぬ）――神官が着ている服だと思ってくれれば間違い無い――を着る機会がほぼ毎日と言って良いほど訪れるが、別に特殊な趣味が高じてそうなった訳では無く、俺がたまたま千年以上の歴史を誇る、『大神（おおがみ）神社』の後取り息子として生を受けてしまった事に因るものであり、俺にとっての狩衣姿は顔を洗うとか風呂に入るとかと同じ、単なる生活習慣の一つとなっていて、不思議に思った事は一回も無かったりする。

とはいえ、学校が終わればさっさと帰り、実家である大神神社の

境内をせっせと掃除した後、晩御飯の時間まで祝詞(のりと)や神事の作法の鍛錬を繰り返す、全く代わり映えの無い毎日を過ごし続けるのはさすがに飽き飽きする。若い身体から溢れるほど放出される、熱いパトスを常時抑える事などできる訳も無く、俺は度々逃走を試みるのだが、その度に不可解なほどのタイミングの悪さで邪魔をする人物が登場するのだ。ちなみに今日も現れやがった。なんてこったい。

「悠(ゆう)くーん。帰るよー」

ホームルームの最中に帰宅準備を万端にし、帰りの挨拶が終わった瞬間に教室の後ろのドア目掛けてダッシュしたはずの俺の耳にのんきな声が届く。クラス中の視線がいっせいに声の主を向き、その後ご丁寧にも俺の方に移動してくるのを感じる。いいからほっといてくれ。

教室の前のドアからひょっこりと顔を覗かせていたその人物は、俺の姿を確認すると廊下を伝って後ろのドアへと移動し、端正な顔立ちの中でも一際目立つ、どこまでも澄んだ黒い瞳で俺を静かに見つめてきた。本日の我がクラスのホームルームは、かなり短時間で終了したはずなのに、なぜ先回りが出来たのか理解できない。普通ではありえん。

そして小さな口から鈴の音のような澄んだ声で、今一番聞きたくない言葉を言い放ちそうな気配を感じた俺は、先手を取って果敢にも説得を開始する。俺の背中には冷たい物が流れ、非常に不愉快な思いをしているが今はそれどころでは無い。

「い……いや今日はこのあ」

と、と言い掛けた俺の口は、次の台詞を忘れてしまったかのように沈黙した。

「一緒に帰る――よね？」
「……」
「まさかサボろうとか考えていない――よね？」
「まっ……まさか……ははっ……」

俺よりふた周りは小さい華奢な体躯から発せられているとは思えないほどの怒気が、俺の抵抗する気力を根こそぎ奪い去っていく。腰まで伸びた艶やかな黒髪が心なしか蠢いて見えるのは気のせいだろうか。

俺は壊れたブリキ玩具のように不自然な動きで後ろを振り向き、クラスの奴等の助けを求めようとしたのだが、俺と目が合う前にいっせいに視線を逸らしやがった。頼りがいの無い奴等め。とはいえ痛いほど気持ちが判ってしまうし、間違いなく俺でも目を逸らしたと思うが。

全てを諦めた俺は、再び緩慢な動作で修羅が佇む廊下へと視線を戻し、相も変わらぬ怒りの波動を感じてガックリと肩を落とす。人生諦めが肝心だ。俺だって命は惜しい。

「一緒に帰らせて頂きます……です」
「宜しい。では帰りましょー」

目の前に居たはずの修羅は、いつの間にか女神のような笑みを浮かべて佇んでいた。

「まったく。いつ見ても腹立たしい」

両足に鉛をぶら下げているかのような足取りで、俺は家へと続いている忌々しい上り坂を、心底やる気が無い表情を浮かべながら登っている。俺の代になったら周囲の反対があろうが莫大な借金を背負おうが、意地でも平地に神社を移築するのが隠された野望だったりもする。しかしその頃には免許を取り、車での移動が主となっている気もするけどな。気にしたら負けだ。

「若い者がそんなんじゃ情けないよ」

「一つしか変わらんだろうが」

俺の一歩前を軽やかに歩いている先ほど修羅になった女――大神(おおが)彩乃(みあやの)は笑顔で振り返りながら、そんな事をのたまいやがった。同年代の平均身長に届かないちっこい身体の何処にエネルギーが蓄えられているやら。無駄な放出を少しでも抑えればもう少しは背も伸びるだろうに。

「不愉快な事を考えてない？」

勘の良い奴め。

「まあどうでも良いけどね」

じゃあほっといてくれ。やさぐれたい気分の時もあるのさ。例えば逃走が失敗した時とか。

俺は内心げっそりしながら、目の前を颯爽と歩いている華奢な後ろ姿を見つめる。彼女は俺が生まれる一年ほど前に、俺の親父とお袋の間に長女として生を受けた。まあ、世間一般で言えば姉に当たる。それ以外の表現が世間にあるのかは知らんが。

根っからの生真面目という言葉をそのまま体現したかのような性格をしており、非行に走るどころか普通の遊びも殆どした事が無い、いまどき珍しい品行方正なお嬢さんだという評価を両親も含めた周囲の大人達はしている。忌々しい事に俺と違って学業も優秀だ。

そして人目を引く類稀なる端正なルックスと、誰にでも優しく笑顔で接する外面の良さで、学校内での人気も高い。しかし誰かから告白されたという話は俺の耳には届いておらず、恋でもして俺の監視を弱めて欲しいというささやかな願いはいまだ叶えられていない。どうやら姉貴のファンクラブもどきが学内で結成されているようで、学校中の野郎共がお互いに牽制しあって今の均衡が成り立っているらしい。全くはた迷惑な話である。

身長以外は完全無敵な完璧超人の姉貴ではあるが、例外的に実の弟である俺の扱いだけが何故か酷い。肩が凝れば俺に肩もみをさせ、重い荷物はさも当然とばかりに俺に押し付けてくる。健康に良いらしい摩訶不思議な味の新作料理を俺の口に詰め込んで違う世界に誘(いざな)い、ダイエットの為に朝っぱら早くから運動を始めた時には、何故か俺も巻き込まれて朝っぱらからたたき起こされる始末。挙句の果てには今日のように鍛錬から逃亡しようと試みると、神掛かった勘の良さで先回りし完璧に阻止してくる。ここまで来るともう虐待だ。

そんな感じで姉貴は大神神社の巫女見習いとして、毎日毎日飽きもせず神楽(かぐら)の鍛錬に明け暮れている。最近は近隣の神社から名指しで指名を受けて神楽を舞う事も増え、着々と大神神社の看板巫女への道を歩んでいる。それに付きあわされている俺の立場も考えてくれと言いたいところだが、俺も俺で祝詞や神事の作法の鍛錬があるから一概に文句も言えないが。

とはいえさすがの姉貴も一度だけ弱音を吐いた事がある。確か俺が小六の頃だったと思うが、デジカメを構えた不審者が大神神社の境内に現れ、すったもんだの末、最終的には警察沙汰にまで発展し

た事があった。
警察に押収されたデータから数多くの巫女服姿の画像が出てきた事を知った姉貴は、本気で巫女を辞めるべく泣きながら両親に直談判していた。しかし結果として姉貴の希望は叶えられる事は無く、その代わり境内のあちらこちらにこれでもかって数の防犯カメラが設置された。

深く傷付いた姉貴に向かって、何やら口に出すのもはばかれる恥ずかしい発言をしたような記憶が、俺の頭の中におぼろげながら残っているが多分気のせいだ。うん、忘れよう。
ちなみに姉貴は直ぐに立ち直り、何故かそれだけで収まらずに今まで以上のパワフルさを身に付けやがった。それと同時に俺の扱いが酷くなった気がする。俺は何か間違ったのか？

とまあ色々と紆余曲折はあったが、なんだかんだ言っても俺は今の境遇に満足していた。
このまま神職の修行を何となく続けてゆくゆくは家業を継ぎ、少し元気すぎるような気もするが、それなりに仲が良い姉貴と一緒に大神神社を守っていく生活も、案外悪くは無いかなと最近思い始めていたのだが――。

「……勘弁してくれ。何なんだ一体」

俺がいくら嘆いてもぼやいても、目の前の状況が変わる事は無かった

第0話：プロローグ（後書き）

弟目線の一人称小説に生まれ変わりました。改めてお付き合い頂ければ幸いです。

第1話：偏屈と素直

相も変わらず俺達の目の前では、不思議な物体が宙を彷徨(さまよ)う光景が繰り広げられている。

自分で言うのもなんだが、俺がまだランドセルを背負っていた純真無垢な頃、自分が正義のヒーローに変身して悪と戦う妄想を繰り広げた事ならある。しかし、さすがに自分の目の前に妙な物体がいきなり現れて、どうして良いか判らず右往左往するといった想像を働かせた事など一度として無く、そんな事を願った記憶も一切無い。そんな事態を思いつく小学生が世の中に居るのか甚だ疑問ではあるが。

平穏無事。日々是好日(にちにちこれこうじつ)。

これらが俺の好きな言葉であり、人間万事塞翁(にんげんばんじさいおう)が馬といったランクの言葉になると、俺の中では既に許容範囲外になる。人生の壁にぶつかれば壁の切れ目が見えるまで素直に壁に沿って歩き、山にぶつかればできるだけ平坦な道のりを探して地味に歩んできた俺の人生哲学だ。

俺の持つキャパシティは、目の前で起こった事態をありのままに受け止めるだけで限界を迎え、その先に起こり得る諸問題を回避するだけで精一杯となる。目の前で起こった問題を力技で乗り切るバイタリティ溢れる行動は、どこかに居る元気娘に任せておけば良いのさ。人には向き不向きって物があって、分不相応な行動は良い結

果を生み出す可能性が低いってもんだ。

ある事象が起こった場合、必ず原因がどこかにあるはずであり、大元の原因を取り除く事に成功すれば大体の物事は良い方向に向かう。まあ今回の最大の問題は原因がさっぱり判らないって事になるからどうしようもないのだが。

学校が終わって姉貴に拉致られて、大神神社の境内をせっせと掃除した後、晩御飯の時間まで各々が黙々と自らに課せられた修練を積む、いつもと代わり映えの無いルーチンワークを繰り返しただけなのだが、何か問題でもあったのか？

日頃の行いの良し悪しが原因だとするとさすがにちょっと自信が無い。比較対象する基準を完璧超人の姉貴に設定されると完全にアウトだ。過ぎ去った時を戻して全ての悪事を無かった事にするのはさすがに虫が良すぎるとは思うので、今後の行動を少しだけ改めるって事でここは一つ手を打って貰えないかな。

などと考えつつも、さすがに現状をどうにかしないと不味いんじゃないかという思いが俺の心の中に沸々と沸いてきた。どれだけの時間を呆け続けていたのかさっぱり判らないが。

昔テレビで見た記憶のある、眼鏡を掛けた生真面目そうな教授の、壊れたレコードのように『プラズマです！』と連呼する声が俺の脳内に鳴り響いている。まあプラズマが何なのかは良く判らんが、とりあえずむやみに触らなければ問題は無いだろう。そんな事を思いつつ姉貴にも注意を促そうとした瞬間、俺の両目に驚きの光景が飛び込んできた。

「おー。柔らかーい」

馬鹿野郎。いや、女だから馬鹿女郎か？　しかしそれだと意味が

違う気もする。

女郎という言葉の響きからは、とてもささやかでかなり微妙な、辛うじて曲線と認識される位の限りなく直線に近いフォルムで、シンプルに構成された姉貴のロリっ子スタイルと違って、もっとバインバインでボインボインな色気溢れる大人の女性の姿が想像される。どこの部分かと聞かれると言葉に詰まるから聞くな。というか、姉貴が少し俺の事を睨んだ気がした。どこまで勘が良いんだ。まさか心が読めるなどという落ちは無いよな。

まあ、そんな事は置いといて、何の警戒心も持っていない幼子のような興味津々といった表情をしながら、無邪気に右手で謎の物体をペタペタと触っている姉貴の姿を見た時は、いくらなんでもさすがに見間違いだと思った。思わず右手で右の頬を抓ってみると少しだけ痛かった。夢じゃなかった。

「ちょっ！　ばっ！　おま！」

「悠くーん。プニプニだよー」

それはようござんしたね。

全身の力が一気に抜けその場に座り込む。姉貴の性格が基本的に能天気なのを痛いほど知っているが、まさかここまで重症だったとは。本気で病気の域まで達しているのではなかろうか。

そんな俺の気持ちを知ってか知らずか――間違いなく後者だ――姉貴は相も変らぬ能天気さで、Ｕｎｉｄｅｎｔｉｆｉｅｄ　Ｍｙｓｔｅｒｉｏｕｓ　Ａｎｉｍａｌ、通称ＵＭＡをつつきまわしている。お前には警戒心が無いのか。一応年齢的には年頃の娘のはずで、その行動はさすがにどうかと思うぞ。

「えいっ！」

とうとう抱きつき始めた。肌触りが良いのか姉貴は目を瞑り幸せそうな顔をしている。目の前でうっとりと夢見心地な顔をされると、俺まで興味が沸いてしまうではないか。可及的速やかにその物体から離れなさい。俺の理性が持つうちに頼む。

「これかなり気持ちいいよ」

「アホか……」

とか言いつつ、目の前でここまでされるといくら俺でもさすがに興味が沸く。多少老成された性格をしているとはいえ、一応俺も好奇心旺盛なお年頃だからな。多感期ってやつだ。

脳内に鳴り響く盛大なアラーム音を無視して、やらずに後悔するならやってから後悔した方が良いという、大昔の偉い人が言っていた、ありがた迷惑な格言に何となく従う事に決め、何も考えずに謎の物体に向かって俺は近づいた。この時一目散に逃げていればまた違った未来が待っていたかもしれないのに。

もしも俺に時間遡行する、時を駆け巡る美少女的な不思議能力があったのなら、間違いなくこの時間に舞い戻ってベタな漫才師でも使わない位の、馬鹿でかいハリセンで思いっきり突っ込みを入れていると思うのだが、幸か不幸か俺にはそんな能力は無かった。本当に残念だ。

後先を全く考えない俺達の短慮に満ち溢れた行動をきっかけにして、事態は無常にも思わぬ方向へと進んでいく。少しだけ開きかかっていた非日常への扉を、自分達の手で思い切り開け広げてしまった。やはり分不相応な行動は良い結果を生み出す可能性が低かった。そんな事は判っていたのに。

俺の右手が不思議な物体に触れた瞬間、本殿は眩いばかりの光に包まれる。

咄嗟に右手を不思議な物体から離すがどうやら既に手遅れのようであり、俺の全身を不愉快な浮遊感が襲う。それと同時に人間の可聴域の上限スレスレだと思えるほど甲高い音が、空気が振動し鼓膜を震わせる物理的なプロセスを無視して、激しい頭痛を伴いながら直接脳内に響き渡る。

強烈な光を受けた両方の目はその機能を一時的に休止し、激しい耳鳴りのせいで思考も満足に働かない。俺はこの不可解な状況下に置かれ、なす術も無く流されそうになっていた。しかし長年聞き慣れた心地よい声が俺の両耳に微かに届き、意識を少しだけ覚醒させる。

「悠くん！」

姉貴の真剣な声が聞こえる。

この声色は俺を心配している時の声だ。姉貴も俺と同じ状況に晒されているはずなのに。

普段は能天気で無駄に明るくて、何故か弟の俺に対してだけ理不尽で、頼りがいが有るんだか無いんだかさっぱり判らなくて、些細な事で子供のように拗ねて喧嘩したりする癖に、こういう時だけはしっかりと姉貴面しやがる。

でも、赤の他人には絶対に見せないが、内面は女の子ぽくってロマンチストで、かなりの怖がりで些細な事をいつまでも気にして悩んでいて、精神的に繊細な部分も多くて傷付きやすくて、そしてたまに俺が支えてあげないと危なっかしい事も知っているぞ。

咄嗟の事態が起こった時の対応の速さは、まだまだ姉貴には敵わない事を実感させられたが、さすがの俺にも男の意地があった。

「姉貴！」

「悠くん！　どこに居るの！？」

俺は目が眩むほどの強烈な光に全身を包まれながら、手探りで姉貴の小さな左手を見つけ、俺の無骨な右手で絶対に離さないように少し強めに握り締める。右手に感じる姉貴の温かさが俺の理性を繋ぎ止め、根拠の無い自信が心の中に湧き上がってくる。姉貴は俺が意地でも守る。

「絶対に離すなよ！」

「判った！」

少しだけ汗ばんだ小さな左手が俺の右手を強く握り返す。この時の俺は周囲で何が巻き起こっているのか全く理解出来ていなかったが、何故か柔らかな手の感触だけは今でもはっきりと覚えている――。

――俺の勝手な予想だが、多分この瞬間に俺達は知らない世界に招かれた。

第1話：偏屈と素直（後書き）

彩乃＝天然、悠＝ツンデレ。そんな図式がいつの間にか出来上がっていました。野郎のツンデレに需要があるのかは謎です。

第2話：受動と能動

世界は沈黙に包まれていた。

妙に静かだ。先程までの喧騒（けんそう）が嘘のようである。

気が狂いそうな程の大音量で鳴り響いていた強烈な耳鳴りは既に収まっており、瞼の裏側で嫌というほど感じていた無駄に明るい光も今は感じない。そして不思議な事に一瞬たりとも意識を失っていないはずなのだが、状況が切り替わった瞬間を何故か把握出来ない。俺は強制的に知覚へとブランクを作られ、居心地の悪い奇妙な感覚を覚えていた。

先程の事態は気のせいだと他人から言われればその通りだとも思えるし、夢だと断言されれば目を開けた瞬間に全てを忘れてしまいそうな程、俺の中では現実感が伴っていない。しかし俺の右手で握り締めている姉貴の手の温もりが、安直な思考の逃避を許さなかった。

目を開ければ全てが判る。俺は内心の動揺を抑え覚悟を決め、現実を受け止めようと行動を起こしかけたが、視覚から得る情報よりも一瞬だけ早く、聴覚から得る情報が飛び込んで来る。

「あれ？　ここは何処だろう？」

俺の緊張感を返せ。まあ、これ位の能天気さが姉貴らしいとは思うが。

オールシーズン対応型の天真爛漫娘（てんしんらんまんむすめ）が、緊張感のかけらも感じていない事を悟った俺は、これ以上自分一人であれこれ考えていても空しさが増すだけだと判断して、徐に両目を開けた。まず俺の目に飛び込んできた、相も変わらず非常識に宙を彷徨っている不思議な物体に嫌そうな視線を向けた後、とりあえず周囲の様子を探る事にする。

窓の外には大きな月が輝いているので今の時刻は夜のようだ。先ほどの不可解な出来事は、俺の記憶が確かならば晩御飯直前に起こったはず。空に月が輝いていたかまでは確認していないが、それほど大きな時間のずれはないように思えた。

そして俺達が今居る場所は、どこかにある神社の本殿のようだ。どこにある神社なのかは判らないが、実家じゃない事なら断言できる。実家の神社よりひと回り大きな本殿には見覚えが無く、それ以前に照明器具らしい物が全く確認できないのに室内が普通に明るいという、非常識極まりない神社など見た事が無い。むしろ縁すら持ちたく無いのだがそれはもう手遅れか。

余り考えたくは無いが、俺達は誘拐かもしくはそれに順ずる何かの手段で実家から連れ出され、この場所に連れて来られたってところか。どんな手段なのかさっぱり思いつかないが、科学がここまで進歩したこの世の中で、理由が付かない不可解な事など起こるはずが無い。百歩譲ってテレポーテーションまでなら妥協してやる。それ以外の、

「神隠しとかかな？」

そう、そういう類の出来事だと俺には対応出来んから認める訳には……。って、あえて人が考えないようにしていた内容にあっさり

と踏み込むなよ。

しかし姉貴はそんな俺の気持ちを知ろうとする素振りを全く見せず、俺の右手を振り回しながら嬉しそうな表情のまま話し掛けてくる。こやつの辞書には危機感とか不安感とかそういった文字は無いのか。とはいえ、狼狽(ろうばい)して泣き叫ばれても俺にはどうしようもないから、このままでも良いとは思うが。

「もしくは異世界招待ってやつかな？」

「それを言うなら異世界召喚だろ」

――異世界召喚。

自分でその単語を口に出したのに、その響きを聞いて俺は酷く後悔した。

今のこの状況が、神隠しとか異世界召喚などというふざけた手段によってもたらされたと仮定すると、どこからどう見ても一般人の俺の手には余る代物だ。ここが家の近所ならばとりあえず歩いていればそのうち帰れるし、日本国内ならば事情を話して交番に駆け込んで保護してもらえば良い。たとえ外国だとしても、どうにかしてどこかの大使館までたどり着ければ、大事になるだろうがそのうち実家には帰して貰えるはず。

しかし国家権力が及ばない摩訶不思議ワールドに紛れ込んでしまったのなら、そういった手段が使えるはずも無い事は理解している。俺に隠されていた不思議な力が今ここでご都合主義的に覚醒し、俺の存在が一般人というカテゴリーから外れるのなら少しは期待できるが、その力が世界を超える力だという保障は無い。というかそんな事考えるだけ無駄だ。ありえん。

「悠君どうしたの？　難しい顔してるよ」

苦虫を噛み潰したかのような顔をしている俺とは対照的に、古式ゆかしい紅白の装束を纏った姉貴は、どこまでもお気楽な様子で俺の顔を見つめている。

神に仕える者としては、もう少し思慮深くなった方が相応しいような気もするが、しょっちゅう難しい顔をして考え込んでいる可愛げのない野郎が側に控えるより、一年中春真っ盛りの如き明るい美少女が側に控えている方が神も喜ぶかもしれんな。

俺なら考えるまでもなく後者を選ぶ。万が一それ以外の選択肢を選ぶ奴がいたら、俺はそいつと交友関係を持とうとはしないだろう。そいつが女ならまだ理解できるが、もし男なら俺の後ろの貞操が危ない。

「もし異世界なら面白い物がありそうだね。探検してみよっか？」

前言撤回。ものには限度がある。

柔道着姿が妙に似合う武道の達人で、元変身ヒーローの俳優が出演する妙にカメラアングルにこだわった秘境探検物語が好きなのは知っているが、言うまでもなくあれは台本があって成り立つ一種のお約束事だぞ。俺達がこの先進むべき場所の安全確認を、あらかじめプロデューサーが行っている訳ではないし、テレビカメラが先乗りして待ち受けている訳でもない。

それに映画や小説の中でも、こういった事態に巻き込まれた時に、不用意な行動を起こすキャラクターには死亡フラグが立つっていうのがお約束だろ。メインヒロインっぽい立ち位置の姉貴には妙な補正が掛かって大丈夫かもしれん。だがな、自分で言うのは少し悲しいが俺は男で間違いなく脇役扱いだぞ。根拠は無いが。

「では行ってみよー」

ちょっと待て。頼むから話を聞いて下さい。いいから止まれ。

「なによー」

上目使いで可愛く頬を膨らませながら見つめられても許可できません。俺の右腕を勢い良く振り回しても許可できません。つうか肩が痛いから止めろ。

「悠君は何が不満なのよ」

「あえて言えば全部かな」

「全部じゃ判りませんー。って、姉であるあたしと一緒に居るのが不満とでも言いたいのかな？　それはどういう意味なのかなー」

「阿呆。今はそういう話をしている場合じゃないだろ」

「じゃあどういう場合なのよ」

「この訳の判らん場所からどうやって帰るか考える。今必要なのはこれだろ？」

「その為の探検じゃない！　あちこち歩き回って、目で見て耳で聞いて判断するのが大事じゃないの？　ここでぼけっとしててもつまらないし」

「あのなぁ……」

姉貴は聞き分けのない駄々っ子のような顔をしながら俺の顔を見つめ続け、先程よりもかなりの勢いをつけて俺の右腕を振り回している。全身で不満を表現する姉貴の姿は幼い外観とマッチして微笑ましい感じもするが、生憎それだけで希望を許可する気持ちにはな

らん。

少しは状況を考えてくれ。

だってそうだろ。だいたいにおいて、この場所が安全かどうかすら判らんのに、のんきに探検シリーズよろしくウロウロする気にはなれん。百歩譲って姉貴の言うように状況確認をするのなら、もう少し慎重に目立たないように配慮すべきである。漠然と「つまらないし」って気分であちこち動かれても良い結果が生まれるとは思えん。

「とりあえず俺の考えを一回聞け。その上でどうするか決めよう」

駄々っ子モードの姉貴の聞き分けが良いとは思えんが、俺は姉貴に意見する。

「なあ姉貴。異世界召喚とか、そういった事をとりあえずは考え」

ないでここから出る事だけを考えよう。と、言おうとした俺の言葉は突如中断させられた。

「良く判ったの。なかなか冷静じゃな」

無駄に偉そうな声が俺の台詞を遮る。

普通に考えれば今回の不可解な事態を招いた黒幕がいきなり登場し、緊張したり狼狽したり恐れおののいたりするタイミングだと思うが、この時の俺の反応は少し違った。

何だか無性に腹が立っていた。ここ最近の俺の全て行動は常に何かに邪魔をされている気がする。どう考えても九割以上は姉貴の仕

業だが、それを認めると少し悲しくなるので意図的に思考から外し、偉そうな声の主の方へと勢い良く振り向き、八つ当たり気味に啖呵を切る。

「お前か！　今回の事態を招いた犯人は……。へ？」

俺の目の前には、身長が五十センチ位の小さな女の子がフワフワと宙に浮かんでいた。

第2話：受動と能動（後書き）

漫才を繰り返す姉弟の前に黒幕登場。次話あたりからやっとあらすじに追いつきます。

第3話：理性と本能

「……」

俺の動きは完全に止まっている。

両目は間違いなく小さな女の子の姿を捉えているはずなのに、思考が完全にフリーズしていた。鳩が豆鉄砲を食ったような顔というのは、多分今の俺の顔が作り出している表情を指しているのだと思う。鏡で自分の顔を確認した訳では無いが、自信を持ってそう断言できる。俺は言葉を発するどころか指先一つ満足に動かせなかった。

なんとなくではあるが、俺は自分の理解を超えた不思議な世界に紛れ込んでしまったという自覚を持っており、この先もっと不可解な出来事が起こるかもしれないという覚悟も、それとなく持っていたつもりだ。しかし目の前の光景は、そんな俺の心構えを全て吹き飛ばす破壊力がある。反則なのにも程があるぞ。

テレビや漫画の中でよく見る登場人物が何かに驚かされたシーンで、心底驚いた対象者がそれなりのリアクションを取っている姿が描写されているが、どう考えてもあれは嘘だ。シナリオが存在する予定調和の中での出来事か、ある程度冷静に物事を判断する余地が残されている場合にのみ、あれは成立する。間違いない。

さすがの姉貴も今回ばかりは驚いた様子で、先程までの駄々っ子ぶりは鳴りを潜めて大人しくしている。怖がりのはずなのに悲鳴の一つも上げないところを見ると、怖いというより驚きの感情の方が強かったのかもしれないな。まあ、目の前に浮かんでいる女の子は、

どこからどう見ても怖さを感じさせないし。

少しだけ余裕を取り戻した俺は、目の前の人物をまじまじと見つめる。

平安時代の貴族のような、それでいて巫女服のような不思議な感じの服を着用している。髪型は肩辺りで切り揃えられたおかっぱ頭であり、頭には大きな赤いリボンを付けていた。

目鼻立ちは幼い感じではあるが、十数年後には絶世の美女に育ちそうなほど整った顔立ちをしている。背が五十センチ位しかない事と宙に浮いている事に目を瞑れば、非常に可愛い女の子であった。まさに人形のようなといった形容が相応しい容姿だ。

思わず、可愛いもの好きの姉貴が見たら放っておかないだろうな、などと一瞬考えたが、今現在姉貴と行動を共にしていることを即座に思い出し、姉貴がどんな表情をしているのか確認すべく右横を向いて顔を覗き込む。

うわぁ。

姉貴はめちゃめちゃ良い顔をしていた。大きな黒い瞳は普段よりもさらに大きく見開かれてキラキラと輝き、浮かべている笑みも当社比百五十パーセント増しになっている。憧れの人物を目の前にした乙女の表情というより、昔から欲しかった玩具を目の前に置かれた子供のような表情といった方がしっくりと来る感じだ。

まあ、この様子ならば問題無かろう。そう判断した俺は、目下の問題事の原因であろう人物の方へと再び視線を移す。

先程まで俺達の目の前に浮かんでいた、直径五十センチ程度の半透明な物体と入れ替わるようにして、その女の子はフワフワと宙に

浮かびながらこちらの様子を笑顔で見つめている。色々と言いたい事は山ほどあるが、とりあえず目の前の事象を全て認めたと仮定すると、半透明な物体の正体はこの女の子といったところか。
半透明の不思議な物体と交流を図ろうとは思えなかったが、姿形が人間と近しい存在なら話は変わる。先程の様子からすると日本語も通じそうだ。とりあえずコンタクトを図って少しでも情報を仕入れなければ。

「なあ、あんたは何者なんだ？」
「わらわは寛大（かんだい）ゆえ怒りはせぬが、もう少し言葉使いには気をつけた方が良いと思うぞ」

無駄に偉そうな口調が少々癪に障るが今のはあちらが正しい。しかし、こいつが今回の事態を招いた犯人かもしれないと思うと、丁寧口調に直す気にはならない。

「ああ、口が悪いのは元々なんだ。気に障ったのなら申し訳ない」
「まあ、緊張しておるだろうし色々と思うところもあるのじゃろう。悠の性格では人から言われて、はいそうですかって訳にもいかんじゃろうからその位は構わんぞ」

女の子の返答を聞いた俺の背筋に悪寒が走った。

こいつは俺の事を知っている。ブラフの可能性もあるが、いちいちそんな事をする必要性は今の会話の流れには存在しない。それ以前に俺の勘が事実であると告げている。こいつは一体何者だ。俺の狭い交友関係には人外の存在など挟まる余地は無い。
動揺した俺は思わず姉貴の方を向く。無駄だとは理解しているが、姉貴の知り合いに人外の存在もしくはそれに類する者達の心当たりがあるのか確認をしようとしたのだ。我ながら混乱するのにも限度

があると思うが、その時はそれが最善の行動だと俺は考えた。しかし俺のその希望は叶わず、結果的に混乱に拍車を掛ける事となる。

姉貴の姿が見当たらない。

いつの間に。一体どこに消えた。

姉貴の姿から目の前の女の子に視線を移し、短い会話を交わしたのはほんの十数秒ほどであり、その時間がそのまま姉貴から目を離した時間となる。広い本殿の中央付近で俺達は謎の女の子と対峙していて、誰かが侵入して来ればそいつの存在に気が付いた可能性が高い。緊張感を保ったままの今の状態ならば、さすがの俺でも見落としはしない――。

――相手が人間であれば。

余計な先入観は捨てるべきか。今までの常識で物事を考えて対応出来る事態は既に越えたと認めるしかないのか。この馬鹿げた状況が事実であると本格的に認めないと駄目なのか。

俺と姉貴が普段生活していた平和な世界から、理解の範疇（はんちゅう）を超える奇妙な世界に迷い込んだという事実が俺の背中に重く圧し掛かり、立て続けに巻き起こった予想外の展開が俺の緊張感をますます高めていく。しかしここで立ち止まる訳には行かない。とにかく姉貴を見つけるのが最優先だ。俺だけが無事では意味が無い。

そんな事を決意した俺の耳に、絹を切り裂くような悲鳴が聞こえてくる。

「ぎにゃー！」

これは姉貴の声じゃない。今の俺には判る。

さすがに冷静とまではいかないが、姉貴の声を判別できる程度には落ち着いている。とはいえ悲鳴を聞かされて無視は出来ない。俺は慌てて声の方向に視線を向けたのだが、俺の両目に驚きの光景が飛び込んできた。

「かわいいー！　ほっぺもプニプニだー」

「やめろー。わらわで遊ぶでないー。つーぶーれーるーぅ……」

幼女に童女が絡んでいる。

もとい、先程まで会話をしていた謎の女の子に姉貴が抱きついて、あれこれ弄んでいる光景が俺の目の前で繰り広げられ、女の子は先程の威厳を全く感じさせる事なくあたふたとしている。姉貴の性格を考えるとこれも予定調和の一つかもしれん。とはいえ俺はガックリと肩を落とす。これでは色々と考えて悩んだり行動したりしている俺が馬鹿みたいではないか。

いや、これはこれで良かったのかもしれない。姉貴は無事だったし女の子に害が無い事が確認できた。俺が姉貴レベルまで能天気になると元の世界に戻れるのか判らなくなるが、多少は気楽に構えないと俺の心が持たない。むしろやってられん。

本格的にやさぐれ始めた俺の耳に、弱々しい声が届く。

「悠……。早く彩乃を引き剥がしてくれんか。このままではわらわの身が持たん……」

今の言葉で疑惑が確信に変わる。さっきまでの俺なら驚いたかもしれんがもう驚かんぞ。俺の事を知っているなら姉貴の事を知ってもおかしくないしな。俺は姉貴の名前を一度も呼んでいない。こ

いつは間違いなく俺達のことを知っている。

「聞こえておるかぁ……」

姉貴にしがみ付かれて玩具にされている女の子は、唯一自由になっている右手を弱々しく上げ、心の底から憂鬱(ゆううつ)だと言わんばかりの顔で俺に助けを求めていた。

綺麗に整えられていた髪の毛はボサボサになり、しっかりと着付けされていた高そうな服は所々乱れている。見るも無残に蹂躙(じゅうりん)されてしまったって感じか。いや、現在進行形か。

「そうだな、俺達に降りかかっている今の状況をしっかり説明してくれるって言うなら、姉貴を何とかするが――どうする？」

「元々説明する気で姿を見せたのじゃから、断る理由など無いぞ」

その返答に満足した俺は、女の子にまとわりついている姉貴にゆっくりと近づき、右手で首根っこを掴んで無理やり引き剥がす。姉貴は未練があるのかいまだにジタバタしているが、俺が押さえていれば大丈夫だろう。

「まったく。ひどい目にあったわい」

「こっちは約束を守ったんだ。そっちも頼むぜ」

「わかっておる。少し待つが良い。全くこやつらは尊敬の念が足りん……」

ブツブツと呪詛(じゅそ)の言葉でも唱えるかのような姿を見せながら、女の子は身だしなみを整え始める。見た目が幼女とはいえ、女性が身だしなみを整える時間くらいは待つデリカシーを持っているつもりだ。

「おほん」

数分後、身だしなみを整え終わった女の子は、やけに偉そうな雰囲気をまといながら俺達に向き直る。そして、俺と姉貴の目を一通り見ると、徐に語り始める。

「既に察しているとは思うが、わらわがそなた達を『高天原(たかまがはら)』に召喚したのじゃ」

高天原？　何処だそれは。言葉の響き的には日本国内っぽいが、あいにく地理は得意科目じゃない。まずは県名から言って貰おうか。俺より方向音痴な姉貴にも判るように……ってお姉さま？　何故そんなに驚いた顔をしているんでしょうか？

「悠くん……高天原だって……すごいね」

だから何処だそれは。

「ひょっとして判ってないの？」

「悠はもう少し勉学に励んだ方が良いぞ」

だから地理は苦手なんだよ。別に日本の地名を全部覚えなくても生活は出来るだろう。なんで可愛そうな子を見るような目でこっちを見るんだ。不愉快だぞ。

「違うよ悠くん。高天原は日本の地名じゃないよ」

「もう良い彩乃。わらわが悠にも理解出来るように、もう少し判りやすくしてやる」

無駄に偉そうな態度をさらにパワーアップさせた女の子は、俺の目を見ながら満面の笑みを浮かべて高々に宣言する。

「我が名は天鈿女命（アマノウズメノミコト）。高天原に住まい、大神神社に祭られている神じゃ」

「はぁ！？」

「えー！　貴女が天鈿女命様なんですか！？」

目の前に居るロリっ子の正体が、俺達の実家の神社が祭る神、天鈿女命だという事を知らされ、今度は俺だけでなく姉貴の動きも完全に停止した。こんなのありかよ。

第3話：理性と本能（後書き）

二人の漫才が三人の漫才に変化しただけという噂もあります。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8789l/

異界の姫巫女

2010年10月28日07時56分発行